

機関番号： 32620

研究種目： 基盤研究 C

研究期間： 2008～2010

課題番号： 20592606

研究課題名（和文） 小児外科的疾患患児の外来看護ケアシステムの構築

研究課題名（英文） Development of nursing care system for outpatient of children with pediatric surgery disease.

研究代表者 西田 みゆき (Miyuki Nishida)

順天堂大学・医療看護学部・講師

研究者番号： 00352691

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、排便障害児の外来看護ケアシステムを構築することであった。母親用介入プログラムは、エンパワーメントを基盤概念として、1) 排便コントロールガイドブック、2) 排便日誌、3) 電話訪問で構成した。子ども用介入プログラムは、子どもが関心をもてるためのキャラクターを用いて、1) 身体構造しくみ、2) 排便行動の確認（下着の着脱、お尻を拭く、手を洗うなど）、3) 下痢や便秘の症状、4) 体調の変化を大人に伝えること、以上の 4 項目についてイラストを用いて記載した。母親用と子ども用のプログラムを統合して、外来看護ケアシステムを構築した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose was to develop care system for outpatient of children with defecation disorders. The intervention program for mothers based empowerment concept and consisted of: 1) Guidebook for defecation control, 2) defecation diary, and 3) telephone visitations. The intervention program for children that a picture book and a defecation journal for school-age children were created employing figurative characters to draw children's interest to aspects surrounding defecation, namely: 1) bodily structure, 2) review of defecation behavior (eg. wearing/removing underwear, wiping, hand-washing), 3) symptoms of diarrhea/constipation, and 4) relating one's condition to adults. I integrated the program for mother and for children, and constructed the outpatient care system.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,400,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,000,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	270,000	3,570,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：小児外科看護 排便障害児、外来看護

1. 研究開始当初の背景

21世紀初頭における母子保健の国民健康計画として「健やか親子21」が策定されている。その4つの主要課題のうちの1つは、子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減である。しかし、子育てをしている約3割が育児ストレスを頻繁に感じていると答え、その重要な要因として子育てサポートの不足が挙げられている。そして、児童虐待は年々増加の一途を辿っており、虐待へと導く要因の第4位には「先天異常、未熟児など医療を必要とする児」となっている。これらのことから、疾患を抱える子どもの親の育児ストレスはより一層強いことが予想され、母親の子育ては困難を極め、その影響を直に受ける子どもを取り巻く環境としては、危うい状況といえる。一方で、医療技術の進歩から、先天性疾患患児の救命が可能になり、疾患を持ちながら成長している子どもが増加しており、小児の救命率が向上すると共に、救命された子どもたちのQOLが注目され始めている。そこで、2003年「小児外科的な疾患を持ち成人期に至った患児の生活における困難感」として、grounded theory approachを参考にした分析により質的因子探索的研究を行った。排便障害のある対象者は、成人した現在でも失禁は続き、それが原因としての就職や結婚などの困難が語られた。幼年期からの失禁の臭いからのいじめや、思春期に自殺を考えたという深刻な悩みを持っていた。このことから、排泄に伴う障害は社会生活を営む上で困難は大きく、発達に伴う生活上の調整を長期的に支援する必要性があるということが明らかになった。また、2005年「排便障害のある子どもをもつ親の排泄に関する困難の実態」を調査し、排便障害のある子どもをもつ親にとっての困難は、排泄の自立に関連して発達段階ごとに違う困難が出現していた。排便障害児の排泄の自立では、通常の子どもが経験する排泄の自立への訓練とは違う過程となるが、その時期、外来通院の間隔が3-6ヶ月となり、適切な指導を受けていない現状が明らかになった。排便障害のある子どもにとっても、社会生活を営む上で排泄の自立を上手く行えるように援助するために具体的な支援策を行っていく必要があることが示唆された。そこで、排便障害のように小児外科的疾患のある子どもの母親自身が自立的に患児のケアに取り組むことができ

るような外来看護システムを構築することが急務であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小児外科的疾患患児の外来看護システムを構築することである。以下の3つを研究目標とし、研究を進めた。

- 1) 小児外科的疾患患児の母親のための「外来看護プログラム」を開発する。
- 2) 小児外科的疾患の子どものための「外来看護プログラム」を開発する。
- 3) 「外来看護プログラム」を軸に「外来看護システム」を構築する。

3. 研究の方法

1) 小児外科的疾患患児の母親のための「外来看護プログラム」

【研究目的】小児外科的疾患のある子どもの母親がエンパワーメントされ、子どもの自立支援できるような外来看護ケアプログラムを開発する。

【方法】対象：排便障害のために外来通院中の幼児期(3-6歳)の排便障害児の母親。看護プログラム：①面接、②「排便コントロールのためのガイドブック」③排便日誌の記載、④電話訪問によって構成していた。データ収集と測定用具：

プログラム前後に以下の測定用具を用い質問紙調査と面接を行い、データとした。

(1) 質問紙

①知識の確認テスト：排便障害児の病態生理と排便調節についての母親の知識について記載した自作質問紙である。

②母親意識尺度(大日向, 1988)：自分自身が母親であることを積極的・肯定的に捉える意識(以下MP)と消極的・否定的に捉える意識(以下MN)の2側面から母親役割の受容に関する意識を測定するものである。

③一般性セルフ・エフィカシー尺度（以下 GSES）（坂野，東條，1986）：これは、個人が一般的にセルフ・エフィカシーをどの程度認知される傾向にあるかを測定するための尺度である。

(2) 面接

子どもの排便状況や母親自身が行っているケアについて半構成的面接法を用いて面接を行った。

【倫理的配慮】所属大学と対象施設の倫理委員会の承認を得て、ヘルシンキ宣言に準じた倫理的原則を遵守して行った。

2) 小児外科的疾患患の子どもに焦点を当てた「外来ケアプログラム」

【研究目的】小児外科的疾患の子どもが排便行動の自律をするための「外来ケアプログラム」を開発する。

【方法】

(1)「排便行動の自立を促すガイドブック」
排便日誌などツールの開発

小児外科的疾患患の母親のための「外来ケアプログラム」開発時に得られた子どもの様子を分析し直し内容を抽出し、目的を明確にした上で作成した。

(2) プログラムの実施

対象：鎖肛かヒルシュスプルング病（以下 H 病）で外科的治療を行い、外来通院中の 6-12 歳の子ども。

看護プログラム：①面接、②「排便行動の自立を促すガイドブック」、③排便日誌によって構成した。

データ収集と測定用具：プログラム前後で、以下の質問紙を用いた測定と面接を行った。

(1) 質問紙

知識の確認テスト：身体の仕組み、排便行動に関する内容の質問紙である。

(2) 面接

子ども：日常生活の中での排便状況や子ども自身が行っていることを中心に半構成的に面接を行った。

母親：プログラムを通しての子どもの排

便行動の変化を半構成的に面接した。

【倫理的配慮】

所属大学と対象施設の倫理委員会の承認を得て、ヘルシンキ宣言に準じた倫理的原則を遵守して行った。特に子どもに対しても、口頭と紙面を用いて説明した。

3) 外来ケアシステムの構築

【研究目的】「外来ケアプログラム」を軸に「外来ケアシステム」を構築する

【方法】排便障害児とその家族が関わる他部門の看護師として、外来看護師、病棟看護師、NICU看護師、小児看護専門看護師、WOC看護師が協働して外来ケアシステムを構築した。つまり、各ユニットにおけるケア状況の共通理解とケアの継続性の検討を行った。母親用外来ケアプログラムと子ども用外来ケアプログラムを統合し、実用可能性を検討の上、内容を再構築して、外来看護ケアシステムとした。

4. 研究成果

1)小児外科的疾患患の母親のための「外来ケアプログラム」

24 名の排便障害児を持つ母親（平均年齢 36.7 歳。SD5.58）を対象として母親用ガイドブック、排便日誌、電話訪問、面接という内容で構成された「外来ケアプログラム」を実施した。プログラム実施期間は 3 - 6 カ月間であった。プログラム前後の知識の確認テストの平均点は有意($p<0.01$)に上昇し、母親意識尺度では有意差はないが肯定的意識は上がり否定的意識は下がり、一般的セルフ・エフィカシー尺度も有意ではないが平均値は上昇した。排便日誌の記載状況では、未提出が 2 名、10 日程度で終了した 1 名、以外はほぼ毎日記載されていた。自宅での排便調節のための行動の変化では、プログラムを受けている中で新たに排便調節に関する行動を起こしたと 21 名の母親が報告した。半構成的面接を行い、プログラムを行ったことで母親は子ども排

便状況、子どもの成長、自分のケアを振り返ることで客観的に捉え直すことができた。また、電話訪問を通して継続的に第三者に子どもやケアのことを話すことができたことで自分の気持ちを建て直し前向きにケアに取り組めるようになったと語った。

2) 小児外科的疾患患の子どもに焦点を当てた「外来ケアプログラム」

(1)「排便行動の自立を促すガイドブック」

排便日誌などツールの開発

①プログラムの作成は、ガイドブックと排便日誌を媒体として、学童期が排便に関心を持つことができることを目的とした。ガイドブックの内容は「身体構造しくみ」「下痢や便秘の症状と対応」「排便行動の確認(下着の着脱、お尻を拭く、手を洗うなど)」、「体調の変化を大人に伝えること」の4項目とした。そして、子どもが関心をもてるためのキャラクターと簡単なストーリー(「うんちろう旅に出る」)を考案し、そのキャラクターを用いて、必要な知識を説明させる方法を選択して絵本を作成した。日々の排便の観察をモニタリングするためのツールとしては、シールを用いて遊び感覚で、自分の排便パターンをつかめるようにした。また、子どもが続けることができる期間を考慮し、1カ月間とした。

(2) プログラムの実施

対象は、鎖肛の子ども3名、H病5名、年齢は6-8歳(平均7.8歳)であった。対象者全員が、ガイドブックは楽しんで読んだ。知識の確認テストは有意ではないが、平均点はプログラム前よりも後の方が上昇した。排便日誌は2名を除いて全員が毎日つけることができた。1名は研究期間を過ぎても、自分でノートを作成して排便日誌を続けた。母親の面接では、「トイレに行く回数が増えた」と語った。自分で坐薬を挿入することができるようになった子ども1名と浣腸ができるようになった子どもが1名いた。

3) 外来ケアシステムの構築

(1) 各ユニット間でのケアの検討

各ユニットでのケアの現状から、どのように外来ケアに繋げるかを検討した。その結果、①家族がどの部署でどのような指導を受けているかを互いに知らない、②小児の場合は排便ケアだけでなく育児に関する指導などもしていかななくてはならない、③予後の説明をするタイミングなどが上がった。以上のことから、外来ケアに繋げるためには、医師との協働

と各ユニット間の連携が必要であり、継続的な関わりの必要性が明らかになった。

(2) 小児外科的疾患患児の母親のための「外来ケアプログラム」では、排便障害児の母親のためのガイドブックについて、母親が在宅でケアを行う際、ケア内容において必要最低限の情報を得ることができることを目的とし構成し直した。内容は、①病態の説明、②スキンケア、③トイレトレーニング、④排便ケアと育児の4つに焦点を絞った。形式は、忙しい母親が在宅で簡単にみることができるようA2用紙2枚に絞った。また、図やイラストを多く用いて見易いことを重視した。活用場所は、NICU、小児病棟、外来で必要な時に使用できるよう配慮した。

(2)「排便障害児のための自立支援プログラム」では、子ども用ガイドブックを用いて自分の体の仕組みへの関心を持たせ、排便日誌で子ども自身が排便をコントロールする実感を得るようにした。

(3) 外来ケアシステム

小児外科的疾患患児の外来看護ケアシステムでは以下の点を骨子としてシステム化していく必要があることが示唆された。

- ① 発症時からのユニットを超えた継続した看護ケア
- ② 母親への正確な知識の提供
- ③ 母親の子どものケアの賞賛と、ケアの确实性の保証
- ④ 子どもの自律を促すための母親への情報提供
- ⑤ 子どもへの自律教育のための発達段階に合わせたツールの活用

今後の課題

作成した媒体を活用し、開発したプログラムを実施していくことで、外来看護ケアシステムが確立させていく必要がある。それには、医師や各ユニットのスタッフを巻き込み実施していき、外来ケアの効果を実証できるようにすることが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

西田みゆき：養育上の困難を抱える母親の empowerment の概念分析、日本看護科学学会誌、30(2),44-53,2010

〔学会発表〕(計10件)

1. MIYUKI NISHIDA :An age-dependent care program tailored to the needs of infants with fecal incontinence. 20th International Nursing Research Congress Focusing on Evidence-Based Practice(Sigma Thera Tau International) Vancouver British Columbia CANADA. 2009
2. 西田みゆき : 排便障害児の母親のための電話訪問の影響. 第19回日本小児看護学会学術集会. 2009
3. 西田みゆき : 排便障害のある小児の在宅ケアプログラムに関する研究. 第35回日本看護研究学会学術集会. 2009
4. MIYUKI NISHIDA :An empowerment program for mothers of children with defecation disabilities . The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science in Kobe Japan. 2009
5. 西田みゆき : 排便障害児のトータルケアプログラム作成のための基礎的研究. 第56回日本小児保健学会. 2009
6. 西田みゆき : 鎖肛やヒルシュスプルング病児の排便状態の実態. 第29回日本看護科学学会. 2009
7. 西田みゆき : 排便障害のある学童期の子どものための排便行動自立ツールの作成. 第20回日本小児看護学会学術集会. 2010. 神戸
8. 西田みゆき : 排便行動自立ツールを用いたプログラム開発の試み. 第20回日本小児看護学会学術集会. 2010. 神戸
9. Miyuki Nishida : Development of teaching aids to facilitate independent defecation in school-age children with defecation disorders. 21th International Nursing Research Congress Focusing on Evidence-Based Practice(Sigma Thera Tau

International)in orando. 2010

10. 西田みゆき : 排便障害児の母親のためのエンパワーメント看護介入プログラムの概念モデルの構築. 日本看護科学学会学術集会. 2010. 札幌

〔図書〕(計0件)
〔産業財産権〕
○出願状況(計0件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

○取得状況(計◇件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
西田 みゆき (Miyuki Nishida)
順天堂大学・医療看護学部・講師
研究者番号 : 00352691